医療法人 翠清会

翠清会梶川病院

翠清会ニュース

2011 10月号 No.183号

日本医療機能評価機構認定施設

今号の内容

■ 江戸時代の名医
■ 脳静脈血栓症について
■ 頭痛について
■ 検査部通信 脳ドックについて
■ 部署紹介 栄養部
■ 学会参加記

江戸時代の名医

副院長・脳神経外科部長　須山嘉雄

▲ 適塾（史跡）

最近まで、毎週日曜の夜に「JIN - 仁 -」というドラマが放映されていました。

現代から幕末にタイムスリップした脳外科医が、スーパードクターとして大活躍するという話です。視聴率は最終回が30%以上もあり、大変人気のあったドラマで、私と同じ脳外科医が主人公であることに興味があり毎週見ていました。

実際の江戸時代にも、このような名医とよばれる方が実際に存在し、番付表のようなものがあったそうです。

そのうちの一人が緒方洪庵（1810 - 1863）で、天然痘やコレラの治療に貢献し、日本に西洋医学を積極的に取りいれるなど、近代医学の祖といわれている医師です。

また、大阪に「適塾」という蘭学塾を作り、幕末から明治維新で活躍した多くの人材を輩出しています。特に、慶応義塾大学を設立した福沢諭吉や、日本赤十字社を設立した佐野常民らが適塾出身者として有名です。洪庵は医師としての技量が優れているのはもちろんですが、生まれついての親切者であったようです。彼自身も「医師というものは、とびきりの親切者以外は、なるべき仕事ではない」と語っていたそうで、私もそのようになれればと常々心がけるようにしています。

参考：ウィキペディア - フリー百科事典 -、NHK“歴史秘話ヒストリア”より

脳静脈血栓症について

院長　若林伸一

脳の動脈が閉塞して発症する脳梗塞はよく知られている疾患ですが、脳から心臓へ戻る経路である静脈や静脈洞がつまって発症する脳静脈血栓症は、比較的まれな疾患です。脳が急速にむくみ、静脈性脳梗塞あるいは脳出血を引き起こし、頭痛、嘔吐、けいれん、更には運動障害、意識障害等の症状が出現します。特に昏睡状態、急速な神経症状の悪化、局所症状がある場合は、予後が不良と報告されており、死亡率はおよそ30%と言われています。原因は感染症、糖尿病、脱水、妊娠、経口避妊薬、外傷、開頭手術後、悪性新生物、血液凝固能亢進状態などが報告されていますが原因が分からない場合も少なくありません。

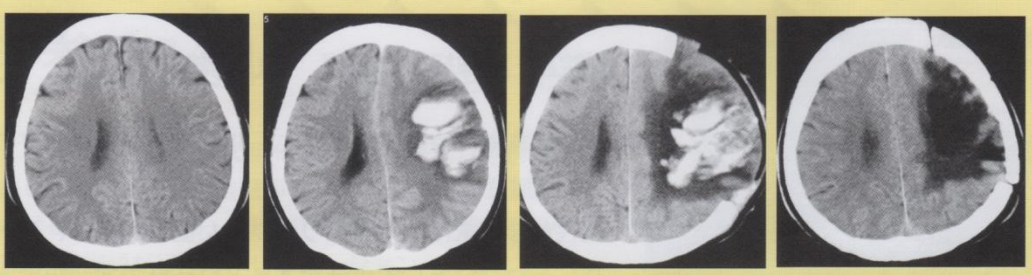

図1　図2　図3　図4

上の図は静脈洞血栓症の頭部CTの経時的変化です。頭痛と左片麻痺を訴えて受診した時のCT（図1）では脳の実質に異常は認めませんでしたが、脳血管撮影では静脈洞の閉塞が確認されました。2日後に失語症と入院時とは反対側の右片麻痺が出現し左前頭葉に多発性脳出血を認め（図2）、その後脳出血と脳浮腫は更に増悪し昏睡状態となったため減圧開頭を行いました（図3）。約半年後、後遺症状を残し杖歩行で自宅に退院となりました（図4）。

治療は、非常に複雑です。血栓を溶かす治療を行うと、出血が発症したりすでにある血腫が増大する危険性が高くなり、また頭蓋内圧を下げることに重点をおくと、血液粘稠度が上昇して血栓が増えることがあります。症状と画像所見、経時的変化から総合的に判断し、抗凝固療法、抗脳浮腫剤投与、高血圧治療、抗けいれん薬投与、減圧開頭術、血管内手術などを組み合わせて治療を行います。動脈閉塞性疾患より可逆的であるため治療をより積極的に行うべきであると言われています。

頭痛について

脳神経内科医長　今村栄次

当院に頭痛で受診される方は非常に多く、急に起こり命に関わるようなものもあれば、慢性的に悩まされるようなものもあり多種多様です。今回は頭痛の種類、病院を受診すべきかどうかについて記します。

頭痛は、一次性頭痛、二次性頭痛、顔面痛・神経痛の三つに大別されます。一次性頭痛として最も有名なものが片頭痛です。15歳以上の日本人の約8.4%に片頭痛があるというアンケート調査結果もあります。片頭痛では、嘔吐や強い痛みのため日常生活に支障を来すことも多いですが、適切な治療により症状を軽くしたり、発作回数を減らしたりすることも可能である場合が多いです。逆に片頭痛から薬物乱用頭痛を生じることがあり、注意が必要です。頭痛患者さんが毎週2～3日、慢性的に鎮痛薬を内服している場合に薬物乱用頭痛に陥りやすいですが、一旦陥ってしまうとなかなか負の連鎖から抜けられなくなるため、早めに脳神経内科や脳神経外科の診察を受けられることをお勧めします。

一次性頭痛として最も多いものは緊張型頭痛です。頭痛の約半数を占め、「へんずつうを診てほしい」と言われて外来受診される方の中にも多く含まれています。精神的要因や、姿勢の問題、頚椎症、眼精疲労なども原因となります。

二次性頭痛は、致命的となることもあり特に注意が必要です。頭頚部血管障害によるもの（くも膜下出血、脳出血、脳梗塞、動脈解離、脳静脈血栓症、側頭動脈炎など）、頭頚部外傷、脳腫瘍、髄膜炎・脳炎、脳脊髄液減少症などによるものがあります。初めて経験する頭痛、頭痛以外に嘔吐や上下肢の脱力、言語障害、意識障害などを伴うような場合はすぐに病院を受診すべきです。

検査部通信　脳ドックについて

診療放射線技師　柴沼千春

脳ドックとは…無症状の方を対象に、MRIによる画像診断を行い、脳の病気に対して、早期発見による最善の治療方法や予防策をたてることを目的とした健康診断です。

2011年4月、日本脳ドック学会認定施設に認定されました。広島市内では3番目の認定施設になります。当院では脳の専門病院として1995年から脳ドックを開始し、16年間で約6300件の件数になりました。また、脳神経外科専門医、脳神経内科専門医、放射線科専門医のトリプルチェックのもとに「脳ドック報告書」を作成しております。

受診コースのご案内

A（基本）コース	MRI（頭部の断面像）、MRA（頭頚部の血管像）、血液検査、心電図 ▶ 料金 **36,500円**

Aコース以外にも認知症の検査も含めたコースなどがありますので、詳しくは当院のホームページをご覧いただくか、あるいはお電話でお問い合わせください。
脳ドックは予約制となっております。ご希望の方は下記の電話番号でご予約ください。

TEL 082-240-2032（予約用直通電話）　**TEL 082-249-6411**（翠清会梶川病院）

部署紹介 第9回

■栄養部

管理栄養士　丸山友香

栄養部は病院管理栄養士２名・日米クック従業員11名（管理栄養士１名・栄養士５名・調理師１名・調理員４名）が在籍しています。

給食業務は日米クックに委託しています。衛生管理を徹底し、安全で美味しい食事を提供できるよう、日々頑張っています。

病院管理栄養士は主に入院患者さんの栄養管理・栄養食事相談、外来患者さんの栄養食事相談を行っています。生活習慣病のある患者さんの病室に訪問し、病院の食事が治療の一環であること、退院後の食生活についてなどお話ししています。外来患者さんには、普段の生活の中で改善できることを見つけられるようお話しています。

患者さんとお話する際には「無理なく続けられる食生活」を提案するよう心がけています。入院中や退院後の食事について、普段の食生活で不安なことや疑問などございましたらご相談ください。

学会参加記

看護部教育主任　松田健司

7月16・17日に愛媛県松山市で開催された第14回日本病院脳神経外科学会で発表しました。今回、看護部からは「看護師による脳卒中ケアユニットにおけるNIHSS評価」「認知症を有する穿頭術後患者のせん妄出現率の調査」「看護師が行うリハビリテーションへの取り組みと課題」という３題について発表しました。研究に際しては、諸先生方のご尽力のもとに仕上げることができ、自信を持って発表に臨む事が出来ました。

朝からの発表だった事もあり前日から宿泊し、発表に備えて英気を養うという目的で、発表前日の夜は野村副院長と発表者３名で松山の夜を満喫しました。その甲斐？あってか、発表も大きなトラブルが起こる事なく無事に終了し、とても有意義な学会を経験することが出来ました。また、様々な研究発表を聞くことが出来たことも、大きな収穫だと思います。

学会発表は、不安やストレスや緊張などと闘わなくてはいけませんが、今回のような楽しい学会であるならば何度でも発表したいものだと、心から思えるような思い出に残る学会でした。

■医療法人■
翠清会 梶川病院
TEL 082-249-6411
FAX 082-244-7190
〒730-0046 広島市中区昭和町 8-20
http://www.suiseikai.jp

編集委員：野村・金川・曽利・曽利（恵）・柴沼・國田・濱田